学 位 論 文 審 査 の 要 旨

		要　　旨
学位申請者	佐藤　真知子 【比較社会文化学専攻　平成28年度生】	本論文は、バレエ史における偉大な芸術家の一人と評されるヴァーツラフ・ニジンスキー（1889?-1950）の振付家としての活動に焦点を当て、これまで支配的であった「性的葛藤を持った振付家本人の自画像である」とするニジンスキー振付作品の解釈に対して、身体技法や身振り言語といった、舞踊のフィジカルな側面に向けられたニジンスキーのまなざしに注目するものである。本論文の目的は、ニジンスキーにとって舞踊とは何であったのかを明らかにすること、舞踊の身体性に関するニジンスキーの振付家としての貢献を再評価することにある。研究対象として、ニジンスキー振付作品（全四作品）の中から、その振付の内実がある程度推測できうる資料が残されている、第一作目の《牧神の午後》（以下、《牧神》）、第二作目の《遊戯》、第三作目の《春の祭典》（以下、《祭典》）の三作品を選択し、ニジンスキーのインタビュー記事から振付のねらいを探り、二作目以降は、振付に関わるスイスの音楽家エミール・ジャック＝ダルクローズの舞踊志向との対比により、ニジンスキーの舞踊志向を特定することを試みた。さらに、《祭典》の初演日からおよそ 1 年間のうちにパリで発行された批評文を分析対象として量的および質的検討をおこない、ニジンスキーの振付に対する観客の議論の様相を明らかにした。 本論文に対する審査は査読に基づいて二回行われ、第一回審査会では、ニジンスキーのインタビュー記事に焦点を当て、作品内容からではなく、身体観という側面から検討する点と当時の批評文を網羅的に分析し、実証的に読み直そうとする点が高く評価された。しかし、論文構成の組み直しが求められ、「様式」、「様式化」、「純粋の身体」、「純粋化」など用語の曖昧な使い方に指摘があり、修正が求められた。第二回審査会では、以上の指摘に対し適切かつ妥当な加筆修正がなされていることを確認し、論文の軸が明確になり、内容が深まったと評価された。 以上の結果、本論文は博士論文としての到達点に達していると評価され本審査委員会は全員一致で、学位申請者佐藤真知子が最終試験に合格し、人間文化創成科学研究科の学位、博士（学術）Ph. D. in Dance Studies として評定するに値すると判定した。
論文題目	ヴァーツラフ・ニジンスキーの舞踊思想　―《牧神の午後》(1912)、《遊戯》(1913)、《春の祭典》(1913)の振付にもとづいて―	
審査委員	（主査）　教授　　猪崎　弥生	
	助教　　福本　まあや	
	教授　　小坂　圭太	
	助教　　田中　琢三	
	教授　　貫　成人（専修大学哲学科）	
インターネット公表	○　学位論文の全文公表の可否（　可　・　否　） ○　「否」の場合の理由 ア．当該論文に立体形状による表現を含む イ．著作権や個人情報に係る制約がある ウ．出版刊行されている、もしくは予定されている エ．学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている オ．特許の申請がある、もしくは予定されている ※本学学位規則に基づく学位論文全文のインターネット公表について	